

ドレッキ意味論の擁護

——自然選択と文化選択の観点から——

久保田 智也

心の志向性、すなわち心が何かを表象することはいかにして可能なのか。この伝統的な哲学的問いに対して、自然科学と調和的な説明を与えようとする志向性の自然化の企てには、今日、多くの研究者が関心を寄せている。

この分野を代表する論者の一人、フレッド・ドレッキは、「情報目的意味論」と呼ばれる理論を立ち上げた (Neander and Schulte 2022)。その核心は、何かを表象するとはそれを表示する（その情報を運ぶ）機能をもつことだというアイデアにある (cf. Dretske 1988, 52)。何かを表示する機能をもつとは、平たく言えば、それを表示するためにあるということである。たとえば、視知覚は物体の形や動きなどを表示するためにあり、速度計は自動車の走行速度を表示するためにある。この発想の魅力は、相関と表象の区別や誤表象の可能性などの志向性の自然化にとって悩ましい問題に単純かつ明快な解答をもたらすように思われるということにある (Dretske 1988, Ch.5)。

しかし同時に、ドレッキの理論は多くの批判にも晒されてきた (cf. McLaughlin 1991; Neander and Schulte 2022)。そのいくつかに関しては再反論が試みられてきたが、未だほとんど手付かずで残されている（そしてそれにもかかわらずドレッキの理論の根幹に関わる）問題点がある。本稿の目的は、そのなかでも二つの問題をめぐって、ドレッキの基本的な主張を擁護することである。

考察の概要を述べよう。第1節では、『行動を説明する』(Dretske 1988)に基づいてドレッキ意味論の骨格を示す。第2節では、本稿において対処すべき二つの批判を紹介する。それらはいずれも、信念の表示機能はオペラント学習に由来するというドレッキの見解に疑いを挟むものである。第3節では、批判に応じるために、ドレッキの「体系表示機能」概念を用いて信念の成立過程を説明しなおす。第4節では、この新たな説明が二つの批判を退けることを確認する。なお、ドレッキは多様な志向的現象について論じている (cf. Dretske 1988, Ch. 3) が、本稿では信念に焦点を絞って議論を進める。

1. ドレッキ意味論の基礎

ドレッキは、Pという信念はPを表示する機能を担う心的状態（の一種）であると主張する。この内実を理解するために、(1) 表示とは何か、(2) 表示機能とは何か、(3) 信念の表示機能はいかにして成立するのかを確認しよう。

1.1 表示

『行動を説明する』における「表示」概念は、おおむね次のように定式化できる。CがPを表示するのは、一定の環境と自然法則のもとで、Cが生じているとき必ずPも成り立っているという場合である（Dretske 1988, 56-7; cf. Dretske 1981, 65, 115）¹。

たとえば、年輪は樹齢を表示する。金属製ペーパークリップの体積は室温を表示する。体重計は、それに乗った人の体重を表示する（Dretske 1988, 54）。チャイムの音は誰かが玄関にいるということを表示する（Dretske 1988, 56-7）。

1.2 表示機能

しかし表示は表象ではない。なぜなら、表象が誤りうるのに対し、表示は誤りえないからである（Dretske 1988, 65-6）。先の定式に従えば、表示子（表示を行うもの）がPを表示するのは、表示子が生じているとき必ずPも成り立っている場合である。したがって、表示子がPを表示するにもかかわらずPが成り立っていないということはありえない。他方で、何かがPを表象するにもかかわらずPが成り立っていないということ、つまり誤表象はしばしば生じる（錯覚や間違った信念などがそれにあたる）。それゆえ、表示を表象と同一視することはできない。

ドレッキが「機能」の概念を導入するのは、一つには、誤表象がいかにして可能かを説明するためである。一般に、あるアイテムがFを機能とするとは、アイテムがFをすべきであるということ、ないし、Fを仕事とするということである（Dretske 1988, 53, 59-60, 63）。たとえばドライバーは、ねじを締めることをその仕事とする。心臓は、血液を循環させるべきである。ねじを締めるのに使えないドライバーや、疾患により血液を循環させられない心臓は、自らの機能を果たして

1 ドレッキが論じるように、CがPを表示するとき、CがPによって引き起こされていなければならないわけではない。本稿で「Cが生じる」「Cがある」と述べるとき、Pとの因果関係は含意されていない。

いえないと言える。

何かを表示することを機能とするアイテムも無数に挙げられる。市役所の地図記号は市役所の位置を表示すべきである。ガソリンメーターはガソリンの残量を表示すべきである。聴覚システムの仕事の一つは外敵の接近を表示することである。

そして、これらのアイテムが表示機能を果たし損ねるケースは、誤表象のケースとちょうど重なるように思われる。市役所の地図記号が、農園の位置に印刷されていれば、この記号は市役所の位置を表示する機能を果たし損ねており、また、市役所の位置を誤表象している。ガソリンメーターが、ガソリンがまだ残っているにもかかわらず、配線の不具合のために「0」を指すとき、メーターは表示機能を果たし損ねており、またガソリンの残量を誤表象している。外敵が近づいてくるかのような幻聴があるとき、聴覚システムは表示機能を果たし損ねており、外敵の接近を誤表象していると言える。

ここから、表象するとは表示機能をもつことであるという発想が生まれる。ある記号は、Pを表示する機能をもつとき、そのときのみ、Pを表象する。この表象は、Pが成り立っているとき（典型的には、Pを表示しているとき）には正しく、Pが成り立っていないときには誤っている。こうして誤表象の可能性が担保される。

1.3 表示機能の付与

しかし、あるアイテムが何かをすべきであるとか、何かを仕事とするということは、正確にはどのようなことなのだろうか。ドレッキによれば、さまざまな人工物や自然物が、それぞれ異なる仕方で機能を担っている。人工物の機能は、製作者の意図に由来する。たとえばハンマーがくぎを打つ機能をもつのは、くぎを打つために作られたからであり、体重計が体重を表示するのは、体重を表示するために作られたからである。他方で、「表示機能」概念をもって志向性を自然化するためには、志向的存在の意図や信念を前提しない機能があることを示さなければならない。そこでドレッキは選択と学習に着目する (cf. Dretske 2002, 495)。

「さまざまな身体器官の生物学的機能」(Dretske 1988, 63) は自然選択によって生じる。一般に、CがFを生物学的機能として担うとは、過去のCがFをすることで個体の適応度を高めたことによって現在のCが存在するということであ

る。たとえば現在の多くの生物に心臓が備わっていることの一つの原因は、過去の心臓が血液循環を行うことによって個体の適応度を高め、心臓をコードする遺伝子が増殖したということにある。よって、心臓は血液循環の機能を担う²。

オペラント学習は、個体に利益をもたらす行動パターンが増殖し、それ以外のパターンが減少するという点で、自然選択と類比的なプロセスとして見なせる。ドレッキによれば、信念の表示機能はこのプロセスによって生じる（Dretske 1988, 84）。すなわち、ある内的状態 C は、オペラント学習のあいだに P を表示し、またそれが原因となって、一定の運動 M の原因に採用されたとき、P を表示する機能を獲得する（つまり、C は P という内容の信念となる）³。

たとえばハトを、ランプが赤く光ったときにキーをつつくことで餌を得られる箱のなかに入れたとしよう。また、赤いランプを見たハトには「これは赤い」の内的表示子が生じるとする。最初、内的表示子はハトにいかなる利益ももたらさない。しかし、ランプが赤く光っているときにキーをつつく餌がもらえるという経験を繰り返すうちに、内的表示子は、キーをつつくという運動を引き起こすようになる（神経システムがそのように調整される）。こうして内的表示子に「これは赤い」を表示する機能が付与され、これからハトがランプの点灯を見たときには、「これは赤い」という信念が形成されるようになる。

本節の内容をまとめておこう。信念とは、P を表示する機能を担う内的表示子である。P を表示するとは、一定の環境と法則のもとで P に伴って生じるということである。内的表示子 C のトークンが P を表示する機能を担うとは、とくに信念の場合、オペラント学習のあいだに C のトークンが P を表示してきたことによって、C が一定の運動の原因に採用されたということである（図1を参照）。なお、以上の説明は、原初的な知覚信念を対象として行われている。ドレッキは、自らの説明が全ての種類の信念に（とりわけ、人間に特有の複合的で抽象的な信念に）そのまま妥当するとは考えていない⁴。

2 ここでドレッキは、いわゆる起源論的な機能概念について語っている。Millikan (1984) など、自然主義的意味論ではしばしば用いられる道具立ての一つである。

3 議論の単純化のために、信念などの心的表象は生物の内部状態（神経状態）によって実現されていると想定しておく。

4 ところで、オペラント学習に関するドレッキの一連の議論が、心理学の見地からしてどれほど新しい（新しかった）のかということは、興味深いテーマであるが、本稿で検討するだけの余裕はない。

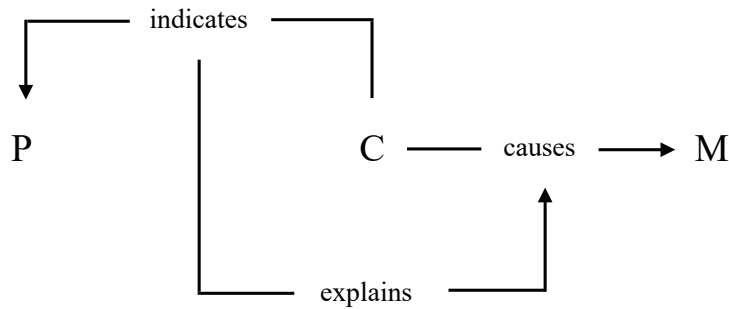


図1 表象 C、事態 P、運動 M の関係図式。Dretsekse (1988, 84) から一部表記を変更して引用。

2. 二つの批判

ドレッキ意味論への批判は、「表示」概念に関わるもの、「学習」概念に関わるもの、表象内容の決定に関わるものの三種に大別できる⁵。ここで扱う二つの批判はいずれも「学習」概念に関係する。第一に、学習を通じて主体が何を信じるようになるのかに関して、ドレッキの主張はいささか疑わしい（このことは管見の限りここで初めて指摘される）。第二に、学習において内的状態が表示を行ったために運動の原因に採用されるということは原理的にありえないと思われる（Hofmann and Schulte 2014, 279ff.）。

2.1 学習において何が学ばれるのか

ドレッキによれば、オペラント学習を通じて内的表示子が表示機能を獲得し、主体は一定の信念を形成できるようになる。ハトの例でいえば、学習を通じて「これは赤い」の内的表示子が「これは赤い」を表示する機能を獲得し、それ以降、ハトは赤く光っているランプを見ると「これは赤い」という信念を形成するようになる。

しかし、学習前後のハトの変化は、「これは赤い」という信念を形成できるかどうかにあると言えるのだろうか。学習以前であれ以後であれ、赤いランプを見たちょうどそのときにハトの内部で生じる出来事に違いはない。この段階では、いずれにせよ、網膜への光の投射、視細胞の興奮、視神経への興奮の伝達等々のプロセスを経て、最終的には「これは赤い」ということの表示子が生じる。学習前後の違いはむしろ、表示子の生成以降に何が生じるか（キーをつつくという

⁵ Neander and Schulte (2022, Sec. 3.1) はドレッキ批判のさまざまな論点を概観している。

運動が引き起こされるかどうか）という段階にある。そうである以上、学習において生じる変化は、赤いランプを見たときに「これは赤い」という信念を形成できるようになったということではないと思われる⁶。

学習における変化を信念という観点から特徴づけるなら、ハトは「ランプが赤く光っているときにキーをつつくと餌をもらえる」という規則についての信念（規則信念）を獲得したのだと考えるべきではないか。またそうだとすれば、「これは赤い」などの知覚信念が、オペラント学習以外のいかなるプロセスによって成立するのかを説明しなければならない。第3節では、この方向でドレッキの理論を改訂する。

2.2 情報は仕事をするか

ドレッキによれば、内的状態のタイプCがPを表示する機能を獲得するためには、オペラント学習においてCのトークンがPを表示し、そしてそのことのゆえに、一定の運動Mの原因に採用されなければならない。これが、個体がPという信念を形成できるようになるための要件である。

しかしホフマンとシュルテによれば、この要件が満たされうるかは疑わしい（Hofmann and Schulte 2014, 279ff.）。というのも、オペラント学習においてCがMの原因に採用されるためには、Cが生じているときにMをすることで報酬を得ることが繰り返されれば十分である。そのとき、Cが何かを表示している必要はない。それゆえ、Cが表示を行ったことのゆえにMの原因に採用されるということはない。

例解しよう。ハトがキーをつつくことで餌をもらえるのは、ランプが赤く光っているときのみである。よって、たしかに、ハトの内的状態Cがキーつつきの原因に採用されるために、Cと赤さが（前者はハトの脳において、後者はランプにおいて）同時に例化されること、つまり共例化は必要である。しかるに、「共例化は情報[表示]がなくても生じうる」（Hofmann and Schulte 2014, 280）。というのも、定義より、CがPを表示するためには、一定の環境と法則のもとでCはPに依

6 さらに、オペラント学習と自然選択を類比的に扱うという観点から言っても、学習によって表示子が表示機能を獲得する（それゆえ、それ以降は信念となる）という見解には不可解さが残る。というのも、オペラント学習において「選択」されるのは、表示子ではなく行動パターンであるからである。それゆえ、信念の表示機能に関する『行動を説明する』の見解は、起源論的機能の概念に支えられていない。これがドレッキにとって致命的な難点となるかは別としても、少なくとも『行動を説明する』における機能の理論が体系性を欠くということは間違いない。

存していなければならない。他方でこの依存性は、CとPの共例化には必要ない。共例化はただの偶然であってもよいからである。そして、学習中に偶然にも共例化が繰り返されたために、ハトがCが生じたときにキーをつつくようになることはありうる。たとえば目隠しされているハトが、ランプが赤く光っているのと同じタイミングで翼に痒みを感じる、もしくは赤いランプの視覚経験（幻覚）に襲われるといった状況では、痒みや視覚経験がキーつつきの原因に採用されるだろう。

そして、偶然の共例化が学習にとって十分であるということは、Cが何かを表示することによってMの原因に採用されることを不可能とする。ハトのオペラント学習の典型的なケースでは、「これは赤い」の表示子がキーつつきの原因に採用される。しかるに、表示の定義から、表示子はランプの点灯と共例化している。そして、共例化は運動の原因への採用に十分である以上、CがPを実際に表示していたケースでさえ、CがMの原因に採用された原因は、Pを表示したことではなく、Pと共例化したことにあると言わなければならない。「情報は共例化によって遮られるのだから、特定の行動に関する情報の因果的効力なるものは錯覚である」（Hofmann and Schulte 2014, 282）。

ホフマンとシュルテによる批判は、ドレッキによる信念の説明の根幹に関わる。信念とはオペラント学習によって表示機能を得た内的状態であるというドレッキの主張に対して、そのような内的状態は存在しないということを示しているからである。情報目的意味論に関するよく知られた問題の一つに、知覚に遠位の対象についての内容を割り当てられるかといった、心的表象の内容決定性の問題がある（cf. Schulte 2018）。しかしこの問題は、ともあれドレッキが考えるような心的表象が存在することは認めた上で、それにもっともらしい内容を帰属させられるかを問うものである。これに対して、ここで紹介した共例化の批判は、もし信念がドレッキの考えるようなものであるならおよそ信念は存在しないと主張する点で、より切迫した問題提起であると言える。

3. 「体系表示機能」概念に基づく信念の理論

前節で示した二つの難点は、ある共通の由来をもつ。それは、ドレッキがもっぱら学習だけに基づいて信念を説明しようとしたということである。この方針は、「これは赤い」のような知覚信念の成り立ちを説明するには適当でない。また、

学習という比較的短期間のプロセスでは、表示の因果的効力は共例化によって遮断されてしまう。

そこで本節では、表象するとは表示する機能をもつことであるというドレッキの基本的発想を保持しつつ、信念の成り立ちについて別の説明を与えられないかを模索したい。その糸口は、『心を自然化する』（Dretske 1995）の「体系表示機能」の概念にある。

3.1 体系表示機能

『行動を説明する』では必ずしも明示的には述べられなかったことだが、『心を自然化する』によれば、心的状態の表示機能は、その由来に関して二つに区別される。

トークン状態の表示機能には二つの異なる源泉がある。(1) 状態は、その表示機能を——そしてそれゆえ、その表象としての身分を——それが属するシステムから受け継いでいるかもしれない。これを体系表示機能と呼ぶ [...]。(2) トークン状態は、他方で、それが属するシステムからではなく、それが属する状態タイプから表示機能を獲得しているかもしれない。[...] そのような機能（体系表示機能があらうとなかろうと、それとは独立に状態タイプに割り当てられたり獲得されたりする機能）を獲得表示機能と呼ぶ。（Dretske 1995, 12-3）

機械や生物に備わっている、一定の仕組みでさまざまな状態 s_1, s_2, \dots, s_i を生み出すシステムを S としよう。このとき、 S が P を表示する機能をもつとは、過去の S が生み出してきた s_1, s_2, \dots, s_i がそれぞれ P の確定的な値 p_1, p_2, \dots, p_i という事態を表示し、またそのことのゆえに、 S が選択されたということである（cf. Dretske 1995, 2）。そしてこのとき、 s_1, s_2, \dots, s_i のトークンは、それぞれ p_1, p_2, \dots, p_i を表示する機能をもつとされ、これが「体系表示機能」と呼ばれる。

その典型例は視覚システムである。このシステムは、網膜に投射された光の波長や分布に応じて一定の脳状態 s_1, s_2, \dots, s_i を生み出す。そして、過去の個体において視覚システムによって生み出されてきた s_1, s_2, \dots, s_i がそれぞれ「これは三角だ」、「これは四角い」、「これは球体だ」などの事態を表示し、またそのことのゆえに（たとえば外敵や可食物の識別を可能にし、生存と繁殖に寄与したことで）

選択された。この限りで、視覚システムは物体の形を表示する機能を担う。そして、このとき s_1, s_2, \dots, s_i は、それぞれ「これは三角だ」、「これは四角い」、「これは球体だ」等々を表示する体系表示機能を担う。

他方で獲得表示機能とは、ある状態が、それを生み出すシステムとは独立に有しうる機能のことである。『行動を説明する』のモデルで一定の内的表示子 C がオペラント学習を通じて得る機能は獲得表示機能に数え入れられる。

次のように説明してもよい。あるものが表示機能を担うことには、そのものがオペラント学習によって運動の原因に採用された場合、自然的ないし文化的に選択された場合、一定の意図をもって制作された場合などがある。そしていずれの場合にも、表示機能を担うものがさまざまな状態をとりうるシステムである場合（感覚器官や人工的な計測器など）と、あるシステムの状態そのものである場合（ランプの点灯を知覚したときの神経状態、仲間内でのみ通じる合言葉など）がある。前者の場合には、システムは表示機能を担い、システムの各状態は体系表示機能を担う。後者の場合はシステムがどのような表示機能を担うか（あるいはいかなる表示機能も担わないのか）によらず、当該の状態が獲得表示機能を担う。

さてドレッキは、体系／獲得表示機能の区別を、知覚経験と信念の区別に重ねる。つまり、知覚経験は体系表示機能を担い、信念は獲得表示機能を担うと見なされる。しかしながら、詳論は控えるが、この点に関するドレッキの議論は必ずしも説得的ではない。実際のところ、どうして信念が体系表示機能を担わないと言えるのか。つまり、オペラント学習を経なければ信念も形成できないとどうして言えるのか。この種の反論は『行動を説明する』出版の前後からすでにあった（Cummins 1991, 105-6; Dennett 1991）。また、第2節で見たように、信念の表示機能は学習に基づくという見方が、二つの深刻な批判を招くのだった。

本節の残りの部分では、ドレッキが、その基本的な発想と道具立てを維持しながら、信念は体系表示機能を担う（それゆえ、学習だけにに基づくものとは限らない）と主張しえたということを示したい。第4節で見るように、そう主張することによってドレッキは二つの批判を克服できるのである。

見通しをよくするために、3.2 と 3.3 の議論の骨組みを示しておく。信念が体系表示機能を担うと主張するために、まずは信念を生み出すシステム（信念システム）の概念を導入する。信念システムは、自然選択ないし文化選択という、オペラント学習よりも大規模な選択の産物である。そして、大規模な選択をくぐり抜けるためには、システムはただ偶然に一定の状況で働く（つまり、単に共例化する）

だけでなく、その状況を表示するのでなければならない。したがって、ホフマンとシュルテの批判にもかかわらず、信念システムは表示機能を担うことができるのである⁷。

3.2 規則信念システム

第2節において、オペラント学習における（たとえば）ハトの変化は、「ランプが赤く光っているときにキーをつつくと餌がもらえる」という規則性を信じるようになったという点にあるのではないかと述べた。だが、ドレッキの理論にこの指摘を反映させるためには工夫が必要である。というのも、まず、規則信念は、ランプの赤さの表示子が生じたときにキーをつつきを引き起こす神経ネットワークの状態 N によって実現されていると見なしてよいだろう。しかるに、 N は、学習が完了したとき初めて例化される。そのため、あるタイプの表示子が学習期間に繰り返し生み出され、それを通じて表示機能を獲得するという『行動を説明する』のモデル（本稿 1.3 を参照）がここでは適用できない。状態 N の表示機能はどこに由来するのだろうか。

およそオペラント条件づけが可能な動物は、規則性を表示することを機能とする先天的システムを有すると考えられる。これを「規則信念システム」と呼ぼう。このシステムは、何らかの利益や不利益に通じる規則性（ランプが赤く光っているときにキーをつつくと餌がもらえる）のある環境に置かれると、一定期間の経験ののちに神経ネットワークを（ランプが赤く光っているという入力に応じてキーをつつきを出力する）特定の状態 N へと調整する。異なる環境で、異なる規則性 l_1, l_2, \dots, l_i に晒されれば、それに応じて異なる状態 n_1, n_2, \dots, n_i への調整が行われる（たとえば、ランプが青く光っているときに翼をはばたかせると餌がもらえるという環境では、ランプが赤く光っているときにキーをつつくと餌がもらえるという場合とは異なる変化が、ハトの内部で生じるだろう）。 n_1, n_2, \dots, n_i は、そのつどの環境の規則性 L を表示する機能をもつ規則信念システムによって生み出された限りで、 l_1, l_2, \dots, l_i を表示する体系機能を担う。要するに、 N の表示機能は N を生み出すシステムの表示機能に由来すると考えられる。

7 ホフマンとシュルテも、表象システムの自然選択という場面では情報は仕事をするかもしれないということを示唆している（Hofmann and Schulte 2014, 281n.25）。以下の考察は、そのアイデアを洗練させたものとも言える。また、信念の志向性をシステムの機能の観点から説明するというやり方は、ミリカンにも見られる（Millikan 1984, 144-6）。ただしミリカンはシステムの選択はもっぱら個体の内部で行われると考える点で、本稿とは立場を異とする。

そしてシステム自体の表示機能は、自然選択に由来する。規則信念システムが選択されるためには、神経状態 n_1, n_2, \dots, n_i が各環境の規則 l_1, l_2, \dots, l_i とただ共例化するだけでなく、それらを表示していなければならない。ある状況 P で、ある運動 M が利益をもたらすかどうかは、環境によって異なる。仮に規則信念システムが、 P において M をなす傾向（神経状態 N ）を、 P における M が利益をもたらす環境と不利益をもたらす環境の両方でランダムに生み出すものであったとしたら、これは必ずしも個体の生存に貢献しないだろう（たとえば、ランプが赤く光ったときにキーをつつくと餌がもらえる環境と、床に電気が流される環境とで、同じ傾向を身につけてしまうハトのことを考えよ）。このシステムが生存に貢献し、選択されるためには、利益に通じるときのみ一定の運動傾向を形成しなければならない。この事実が共例化の問題への応答にあたって鍵となる。

3.3 知覚信念システム

オペラント条件づけを通じて形成されるのは規則信念であると考えらるなら、今度は、知覚信念（知覚している当の対象についての信念）がいかにして形成されるのかについて、『行動を説明する』のオペラント学習モデルに代わる説明が必要となる。以下では、知覚信念を先天的なものと後天的なものに区別し、それぞれの成立過程を論じる。

3.3.1 先天的システム

ハトであれ、言語習得以前の幼児であれ、たとえば赤いものを見たときに「これは赤い」と信じることができるのだとすれば、ハトや幼児には「これは赤い」という信念を形成するシステムが先天的に備わっていると考えられる。実際のところ、オペラント学習は規則信念を生み出すことしかできず、（以下に見るように）後天的な信念システムは言語実践を介して獲得されるのであるから、非言語的主体の知覚信念は先天的システムの産物として説明するほかない。

先天的な知覚信念システムの表示機能は、規則信念システムと同様に、自然選択に由来する。 P の表示子を生み出すシステムは、 P においてのみ個体に利益をもたらす生得的運動の原因に採用されることで選択されたかもしれない。あるいは、規則信念システムとともにオペラント学習を可能とすることで、生存に有利に働いてきたのかもしれない。いずれにせよ重要なのは、自然選択をくぐり抜けるために、システムが生み出す内的状態は、ただ P と共例化するだけでなく、 P

を表示しなければならなかったということである。生得的な行動であれ学習された行動であれ、それが利益をもたらす状況を表示する内的状態によって引き起こされるのでなければ、個体の生存の助けになるとは限らない。

3.3.2 後天的システム

他方で、少なくとも人間に関して、全ての知覚信念が先天的であるわけではない。たとえば、トラについての説明を見聞きしたことのない人は、初めてトラを見たとき「あれはトラだ」という信念を形成できないだろう。トラを見たときに「あれはトラだ」と信じる（判断する）能力、つまり知覚信念システムは、後天的に獲得されなければならない。問題は、システムが後天的である以上、表示機能が自然選択に由来するという説明はここでは使えないということである。

後天的な知覚信念システムは、Pの（真正な）知覚経験に応じて「P」という発話への傾向的状态を生み出すシステム（発話傾向システム）であると考えられる。少なくとも、そう考えることによって、後天的システムの表示機能がいかんして生じるのかを説明できるようになる。

発話傾向システムは、個体から個体へさまざまな仕方で継承される。たとえば、子供が親と動物園を訪れ、トラの檻の前で「あれがトラだよ」と親から教わることで、次にトラを見たとき「あれはトラだ」と発話するようになるということもあるだろう。あるいは、親や兄弟の「そこにトラがいる」といった会話を聞いているうちに、自ずと「トラ」という語を使えるようになるかもしれない。さらには、子供向け動物図鑑のトラの写真を見たり、説明文を読んだりすることで、のちにトラの実物を見たときに「あれはトラだ」と発話できるようになるということもあるだろう。この場合は、図鑑の作成者からシステムが受け継がれている。

重要なのは、発話傾向システムが（親や図鑑作成者において）Pを表示してきたのでなければ、このシステムが継承されることはなかったであろうということである。というのも、たとえば、あるシステムが「あれはトラだ」ということを表示しないとは、トラがいない状況で、「あれはトラだ」という発話への傾向的状态を生み出すということである。そうしたシステムを有する個体は、トラがいない状況で「あれはトラだ」と誤って発話してしまうだろう。そしてその場合、共同体の他の成員（親や教師）から、発話の誤りを指摘される。すると個体はこれ以降、トラがいない状況で「あれはトラだ」と発話する傾向性をもたなくなる。こうして問題のあるシステムは消失し、他の個体に受け継がれることもない。言語共同

体において、他者の発話の否定という営みが存在するかぎり、誤った発話傾向を生み出すシステムは遅かれ早かれ失われる⁸。発話傾向システムがこの文化的選択のプロセスをくぐり抜けるためには、Pを知覚したときのみ（それゆえ、Pが成り立っているときのみ）「P」という発話への傾向的状态を生み出してきたのでなければならない。

十分に普及した発話傾向システムは、文化的選択に由来する表示機能を担う。それゆえまた、システムによって生み出される傾向的状态は、体系表示機能を担う信念であると言える⁹。

4. 批判への応答

以上では、体系表示機能と信念システムという概念を用いて信念の成立過程を描きなおした。二つの批判への対応は、次のようにまとめることができる。

第一に、学習を通じて得られるのは規則信念であって知覚信念ではないのではないか、という批判があった。これに応じて、第3節では、オペラント条件づけを規則信念の形成過程として捉え直した。また、知覚信念の形成に関しては、オペラント条件づけ以外のプロセスに基づく説明を補足した。

第二に、オペラント学習においては、一定の事態とただ偶然に共例化しただけの内的状態も運動の原因に採用されてしまう以上、学習を通じて表示機能が生じることはないのではないか、という批判があった。前節ではこれに応じるために、信念の表示機能を獲得表示機能ではなく信念システムに由来する体系表示

8 ここで言っているのは、「あれはFだ」という知覚信念の志向性の説明である。それゆえ、もちろん、誤った言説（への傾向性）が社会に流布しないところで主張するつもりはない。誤った発話への傾向性が普及してしまう可能性は、発話の正誤に関する権威（たとえば、言語を学ぶ子供にとっての親のように、その人による批判は無条件に受け入れざるをえないような相手）が学習者の周囲に存在するかどうか依存する。存在する場合、誤った発話傾向は淘汰されるだろう。知覚による識別を表す発話はこの場合に該当する。他方で、たとえば陰謀論者の周囲に批判者が存在すると、また存在したところでその批判が受け入れられるとも限らない。

9 なお、本節の議論は信念の志向性の素描にすぎないということを断っておく。というのもここでは、『行動を説明する』と同様、「信念の全体論的性格」（Dretske 1988, 150）に十全な説明が与えられていないからである。たとえば、後天的システムに関して、「あれはトラだ」という信念がいかにして形成されるようになるかを論じたが、この信念をもつために個体は、「トラとはしかじかの動物である」という形式のさまざまな知識、つまりトラの概念ももっていなければならないだろう（cf. Dretske 1988, 153-4）。しかし、概念のように、知覚の対象だけに関わるのではないより一般的な内容をもつ心的表象の成り立ちについて、本稿では十分に検討できなかった。これは今後の課題とする。

機能として説明しなおした。信念システムは、ただ共例化するだけではくぐり抜けられないような、大規模な選択の産物である。それゆえ批判は解消される¹⁰。

5. おわりに

本稿の目的は、ドレッキ意味論を二つの批判から擁護することであった。そのためには、信念の成立基盤をオペラント学習だけに求めるというドレッキの方針を撤回しなければならないことを確認した。そのうえで、ドレッキの「体系表示機能」概念に着目し、信念を自然選択や文化選択に基づく体系表示機能を担うものとして記述しなおした。

ところで、情報目的意味論を洗練させ、さまざまな難点を克服するということは、近年ではネアンダーやシュルテが試みてきたことでもある（cf. Neander 2017; Schulte 2018）。彼らに共通して言えるのは、知覚の表象内容を知覚システムの機能に基づいて説明しているということ、そして、さしあたりは考察の主題を知覚に限定しているということである。これに対して本稿では、システムの機能に基づく説明は知覚だけでなく信念にも適用できるということを明らかにし、情報目的意味論の更なる展開のための基盤を用意できたと言える。次の課題の一つは、これに立脚して、知的により高度な信念や、欲求についての説明を与えることである。

参考文献

- McLaughlin, Brian P. (ed.). 1991. *Dretske and his Critics*, MIT Press.
- Cummins, Robert. 1991. "The Role of Mental Meaning in Psychological Explanation," in McLaughlin 1991.
- Dennett, Daniel C. 1991. "Ways of Establishing Harmony," in McLaughlin 1991.

10 しかしなお、単なる共例化が奇跡的に連続し、それによってシステムが大規模な選択をくぐり抜けるということはあるのではないか、と疑われるかもしれない（Hofmann and Schulte 2014, 281n.25）。つまり、あるシステムが、Pとの一切の法則的結びつきを欠くにもかかわらず、無数の世代の無数の個体の内部で、たまたまPのときのみ一定の内的状態を生み出しつづけ、それによって選択される、ということはあるのではないか。ドレッキは、表示の要件を緩めることで、この奇跡的シナリオも表示の一例として扱いうる（実際のところ、論点を絞るためにここまで言及を避けてきたが、ドレッキの「表示」概念についてはさまざまな難点が知られており、いずれにせよ何らかの改訂は求められる。そのさい、たとえばミリカンの提案が参考になるだろう。cf. Millikan 2004, Ch.3）。したがって、大規模な共例化という想定は、それが真正の可能性であるかどうかによらず、大きな問題にはならない。

- Dretske, Fred. 1981. *Knowledge and the Flow of Information*. MIT Press.
- . 1988. *Explaining Behavior: Reasons in a World of Causes*. MIT Press.
- . 1995. *Naturalizing the Mind*. MIT Press.
- . 2002. “A Recipe for Thought,” in *Philosophy of Mind: Classical and Contemporary Readings*, David J. Chalmers (ed.), Oxford University Press.
- Hofmann, Frank and Schulte, Peter. 2014. “The Structuring Causes of Behavior: Has Dretske Saved Mental Causation?” *Acta Analytica*, 29 (3), 267–84.
- Millikan, Ruth G. 1984. *Language, Thought, and Other Biological Categories: New Foundations for Realism*. MIT Press.
- . 2004. *Varieties of Meaning*. MIT Press.
- Neander, Karen. 2017. *A Mark of the Mental: In Defense of Informational Teleosemantics*. MIT Press.
- Neander, Karen and Schulte, Peter. 2022. “Teleological Theories of Mental Content,” in *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Edward N. Zalta and Uri Nodelman (eds.). (<https://plato.stanford.edu/entries/content-teleological/> 最終閲覧日 2024 年 11 月 26 日).
- Schulte, Peter. 2018. “Perceiving the World Outside: How to Solve the Distality Problem for Informational Teleosemantics,” *Philosophical Quarterly*, 68 (271), 349–69.